蒼洋の城塞３

英国艦隊参陣

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

第一章　「キング・ジョージ五世」の標的　9
第二章　燃える補給線　41
第三章　小沢治三郎の献策　73
第四章　堅牢なる敵　107
第五章　第三次珊瑚海海戦　163
第六章　英雄勇退　231

10°N
トラック環礁
0°
カビエン
ラバウル
ソロモン諸島
ブーゲンビル島
パプア半島
ルイジアード諸島
ツラギ
10°S
ラビ
ポート・モレスビー
ガダルカナル島
デボイネ諸島
エスピリッツサント島
ケアンズ
ニューヘブリデス諸島
タウンズビル
20°S
チャーターズ・タワーズ
ニューカレドニア島
ブリスベン
150°E
160°E

珊瑚海周辺図

蒼洋の城塞 3

英国艦隊参陣

第一章　「キング・ジョージ五世」の標的

1

「目標まで八〇浬」

木更津航空隊の飛行隊長溝口精三少佐の耳に、主偵察員籾山誠司特務少尉の声が届いた。

木更津空は四月一八日の房総沖海戦で、三沢航空隊、及び友軍の潜水艦と協同して、敵空母一隻撃沈の武勲を立てた部隊だ。

同海戦後は、上位部隊である第二六航空戦隊に従って、ニューギニア南東岸の要地ポート・モレスビーへの進出を命じられていたが、現地飛行場の完成が遅れたため、待機が続いた。

八月八日、モレスビーの飛行場がようやく完成し、第二五、第二六両航空戦隊に進出が命じられたため、同地の日本軍飛行場に展開したのだ。

両部隊の作戦目的は、珊瑚海の制空権、制海権の奪取にある。

特に重要なのが、豪州北東部に位置するタウンズビルの米軍飛行場に対する攻撃だ。

同飛行場は、七月二五日、第三艦隊が航空攻撃と艦砲射撃によって使用不能に追い込んだが、米国の工業力をもってすれば、短期間で復旧されることは目に見えている。

攻撃を反復し、飛行場の復旧を阻止しなければ、戦線を安定させることはできない。

タウンズビルに対する最初の攻撃は、八月一一日。二五航戦隷下の零戦二七機、一式陸攻三二機により実施された。

この日――八月一三日の攻撃は、二回目になる。

参加機数は、二六航戦隷下の第六航空隊に所属する零戦三六機、木更津空の一式陸攻二四機、三沢空の一式陸攻二二機、計八二機だ。

モレスビーの飛行場を飛び立ち、進撃を開始してから約三時間。

三〇分後には、タウンズビルの飛行場と市街地が

視界に入る。
「七〇（七〇〇〇メートル）まで上昇する。後続機に送信しろ」
「『高度七〇』。後続機に送信します」
主電信員の田畑喜三郎一等飛行兵曹が、溝口の命令に復唱を返した。
信号灯によって、後続機に「高度七〇」が送信される。
溝口は大きくバンクして合図を送り、操縦桿を手前に引きつける。
五〇〇〇メートルの高度を保っていた一式陸攻が機首を上向け、緩やかな角度で上昇を開始する。
高度三〇〇〇メートルまで五分四九秒の上昇性能を持つ一式陸攻だが、高度が五〇〇〇メートルを超えると上昇力も鈍る。
重い荷を背負って、急な坂道を上ろうとするように、少しずつ高度を稼いでゆく。
上昇するにつれ、気温が低下する。
高空での飛行に備え、全員が防寒着に身を固めているが、寒さは厚い衣服の隙間から容赦なく入り込んで来る。
高高度の低温は、青森県の弘前に生まれ育った溝口にとっても耐え難いほどだ。
木更津空の陸攻乗りには、九州や四国出身の者もいるが、彼らは自分以上に辛い思いをしているだろうと思う。
（爆撃が終わって離脱するまで、一時間ほどだ。その間だけ耐えてくれ）
指揮官機の操縦桿を握りながら、溝口は部下たちに呼びかけた。
機体の右方に、陸地が見える。
最初はぼんやりとした影のようにしか見えなかったが、接近するにつれ、起伏の多いごつごつとした地形がはっきりして来る。
豪州北東部のクイーンズランド州だ。
南下するにつれて海岸が近づき、内陸までを見通

せるようになる。
潤いという言葉とはおよそ縁がなさそうな赤茶けた大地が、地平線まで続いている。
「目的地まで三〇浬」
籾山が報告するのと、高度計の針が七〇〇〇に達するのがほとんど同時だった。
「後続機、どうか？」
「木更津空、三沢空とも、本機に続行しています。六空は、前下方に展開しています」
副操縦員の日高正平一等飛行兵曹が、溝口の問いに答えた。
溝口は身体を僅かに浮かし、前下方を見た。
護衛を担当する零戦の編隊が、四隊に分かれて展開している。陸攻との高度差は、一〇〇〇メートルといったところだ。
零戦二一型が搭載する中島「栄」一二型エンジンは、高度六〇〇〇メートル以上になると、性能が大きく低下する。
六空の零戦は、性能の低下を来すことなく戦える、ぎりぎりの高度を保っているのだ。
「目論見通りに行くかどうか、だな」
操縦桿を握り直しながら、溝口は口中で呟いた。
一昨日、タウンズビルを攻撃した二五航戦は、目的地の手前で敵戦闘機の迎撃を受け、多数の未帰還機を出した。
タウンズビルの米軍飛行場は、未だに稼働状態にはないが、米軍はタウンズビルの周辺に設けた新たな飛行場から、戦闘機を出撃させたのだ。
モレスビー～タウンズビル間の距離は五八〇浬。
護衛の零戦には、航続性能ぎりぎりの距離であり、タウンズビル上空での空戦時間は一〇分程度しか取れない。
このため二五航戦の陸攻隊は、充分な援護を受けられず、タウンズビルに対する攻撃も中途半端なものに終わった。
五月二七日、ソロモン諸島のツラギでも同じこと

が起こっている。
ラバウル～ツラギ間の距離は、モレスビー～タウンズビル間同様、零戦の航続性能ぎりぎりであったため、攻撃隊に随伴していた零戦隊は、早めに引き上げざるを得なかったのだ。
結果、多数の陸攻が敵戦闘機に撃墜されている。
基地航空隊は、ソロモンでの失敗を、豪州本土で繰り返したのだ。
二六航戦司令部は戦訓に鑑み、高高度からの爆撃を選択した。
豪州本土における米軍の主力戦闘機カーチスP40〝ウォーホーク〟は、上昇性能が低く、高高度に到達するまでに時間がかかる。
陸攻の高度まで到達しようとしても、陸攻隊の下方には零戦が展開している。
敵戦闘機が高高度まで上がれず、四苦八苦しているうちに投弾を終えるのだ。
「高高度からの投弾は命中率が低い。効果は期待できないのでは？」
そのように危惧する声も二六航戦司令部の中にあったが、溝口は、
「そこは腕で補いますよ」
と言って、戦爆連合八二機の攻撃隊を率いて出撃したのだった。
溝口としては、大言壮語をしたつもりはない。
響導機の機長と主偵察員、爆撃手を兼任する鈴木十郎飛行兵曹長は、特技章を持つ水平爆撃の名手だ。房総沖では敵空母への投弾を見事に成功させた実績を持ち、溝口のみならず、木更津空の全搭乗員が全幅の信頼を置いている。
「目標まで一五浬」
「前方に市街地。タウンズビルです！」
籾山と日高が、ほぼ同時に叫び声を上げた。
溝口は、前下方に目を凝らした。
複数の島が南北に連なっており、その向こうにお椀形の湾が見える。事前情報によれば、クリーブラ

ンド湾という名称だ。
先の第二次珊瑚海海戦では、第三艦隊隷下の戦艦「霧島」「比叡」、重巡「那智」「足柄」が、湾口から飛行場に艦砲射撃を見舞ったと聞いている。
湾の東岸には、密集した建造物多数が見える。
タウンズビルの米軍飛行場は、市街地の南東、クリーブランド湾に面した場所にあるはずだ。
「爆撃手席に入ります」
籾山が座席から離れ、機首の爆撃手席に移動した。
副偵察員や副電信員らも、機体の後部に移動し、旋回機銃座に取り付く。
「全機宛打電。『目標発見。突撃隊形作レ』」
溝口は、田畑に命じた。
二番機が溝口機に代わって編隊の先頭に立つ。
操縦席からは直接見えないが、後方では、木更津空、三沢空の各機が、傘形の陣形を形成しているはずだ。
嚮導機に合わせ、木更津空と三沢空、合計四六機の陸攻が、一斉に投弾するのだ。
今回は、木更津空が五〇番（五〇〇キロ爆弾）二発を、三沢空が二五番（二五〇キロ爆弾）四発を、それぞれ搭載している。
命中率が二〇パーセント程度に留まったとしても、五〇番と二五番、合計三〇発前後がタウンズビルの飛行場を直撃する。
同地における飛行場の復旧が、どこまで進んでいるかは不明だが、工事を数日間遅らせることは可能なはずだ。
「頼むぞ、鈴木」
誰よりも信頼する部下に、溝口はその言葉を投げかけた。
「前下方より敵機。直掩隊、戦闘を開始します！」
不意に、爆撃手席の籾山から報告が飛び込んだ。
「全機宛打電。『高度ソノママ』」
「『高度ソノママ』。全機宛、打電します」
溝口の命令に、田畑が復唱を返す。

敵機がP40なら、零戦が優位に立てる。
仮に、零戦を振り切る機体があるとしても、現在の高度まで上がって来るには、かなりの時間を要するはずだ。
七〇〇〇メートルの飛行高度は、搭乗員を厳寒にさらすが、同時に機体と搭乗員を守るための強力な武器でもある。
前下方――陸攻隊よりも一〇〇〇メートル以上下がった空域では、多数の機体が飛び回り、銃火を交わしている。
時折火を噴き、煙を引きずりながら墜落してゆく機体がある。
撃墜された搭乗員にとっては死の苦しみであろうが、七〇〇〇メートルの高度から見下ろす空中戦の光景には、命のやり取りという実感が薄い。
一見、羽虫の群れが飛び交っているようであり、どこか現実離れした光景に感じられた。
「我に接近せる敵機なし」
「狙い通りだ」
籾山の報告を受け、溝口は返答した。
零戦隊は、敵機の接近を阻んでいる。
陸攻隊の下方に零戦隊を展開させ、敵機への楯とした戦術が成功したのだ。
「全機宛発信。『全軍突撃セヨ』」
「『全軍突撃セヨ』。全機宛、発信します！」
溝口の命令に、田畑が興奮した声で復唱を返した。
「短短長短短」が繰り返し打電され、先頭の鈴木機が速力を上げる。
溝口もエンジン・スロットルを開く。
両翼に装備する三菱「火星」一一型二基が猛々しく咆哮し、機体が加速される。
木更津空と三沢空、合計四六機の一式陸攻が、最大時速の四四四キロに近い速力で、タウンズビルの米軍飛行場へと殺到してゆく。
鈴木機はまっすぐタウンズビルに向かうのではなく、クリーブランド湾口にある三角の島――マグネ

ティック島を東に迂回した。島の上に、対空砲陣地が設けられている可能性を危惧したのだろう。

鈴木機に続いて、溝口機がマグネティック島を東から南へと回り込み、クリーブランド湾の上空に進入する。

「湾内に艦船約二〇。うち巡洋艦らしき中型艦二。駆逐艦らしき小型艦六！」

「艦船攻撃の要なし」

籾山が送って来た報告に、溝口は即答した。

目標は在泊艦船ではなく、飛行場だ。

「敵艦発砲！」

籾山が張り詰めた声で、新たな報告を送った。

一〇秒ほどの間を置いて、鈴木機の前方や左右に、続けざまに爆発光が閃き、黒い爆煙が湧き出した。

鈴木機だけではない。溝口機の周囲でも爆発が起こり、プロペラが黒煙を巻き込んで、後方へと吹き飛ばす。

敵弾は切れ間なく炸裂するが、射撃精度は良好とは言えない。

房総沖海戦で戦った敵空母の対空砲火に比べ、照準が甘いようだ。

陸攻隊が七〇〇〇の高度を飛行しているため、射撃が正確さを欠くのかもしれない。

先頭の鈴木機は、対空砲火を恐れる様子も見せず、クリーブランド湾の上空を突っ切る。

溝口機以下の各機も鈴木機に従い、対空砲火の爆煙の中を駆け抜けてゆく。

鈴木機が、爆弾槽の扉を開くのが見えた。

籾山も鈴木機に倣ったのだろう、機体の空気抵抗が増大し、速力が僅かに低下したことが、操縦桿を通じて感じ取れた。

数秒後、鈴木機の胴体下から、二つの黒い塊が投下された。

ほとんど間を置かずに、伝声管から「てっ！」という叫びが伝わり、一式陸攻の機体が上昇する。

籾山が、鈴木の投弾に合わせて、五〇番二発を投

下したのだ。

「後続機、投下！」

隣席の日高が、興奮した声で叫ぶ。

なおも対空砲火が撃ち上げられる中、四六機の一式陸攻は、敵飛行場の上空を通過する。

麾下の陸攻を先に行かせ、溝口は右の水平旋回をかけた。

一旦上空を通過したタウンズビルの敵飛行場が、再び視界に入って来た。

弾着が始まり、地上に次々と爆炎が躍っている。

滑走路の中央に炎が上がったかと思えば、駐機場に閃光が走る様も目撃される。

格納庫と思われる建造物にも一発が直撃したらしく、屋根が引き剝がされた真下から、黒い爆煙が奔騰する。

狙い通り、飛行場に落下する五〇番、二五番がある一方、外れ弾も多数に上る。

滑走路脇の草地に落下するもの、クリーブランド湾に落下し、海水を奔騰させるもの、飛行場から大きく外れた場所で、土砂だけを噴き上げるものと、半分以上が無駄弾に終わっている。

それでも、三割から四割程度は有効弾となったようだ。

何よりも、投弾まで陸攻が一機も損なわれなかったことが大きい。

今回の作戦は、成功を収めたと言える。

「田畑、司令部宛打電。『我、〈タウンズビル〉飛行場ヲ爆撃ス。滑走路、付帯設備ニ命中弾多数ヲ認ム。〇九一六（現地時間一〇時二六分）』」

溝口が命じたとき、

「前上方、敵機！」

籾山が、緊張した声で叫んだ。

「前上方だと⁉」

溝口は、愕然として叫んだ。

陸攻が敵戦闘機に捕捉されぬよう、高度七〇〇〇からの投弾を選んだが、自分たちよりも高い位置か

ら仕掛けて来た敵機がいたのか。
溝口が顔を上げ、攻撃隊を注視したときには、木更津空の陸攻二機、三沢空の陸攻一機が火を噴いている。
たった今、三機の陸攻を仕留めた敵機は、機体を左に大きく倒し、急降下によって離脱する。
続いて二機の敵戦闘機が、陸攻隊の前上方から向かって来る。
両翼のエンジン・ナセルの後ろに胴体が伸び、その間にコクピットが位置している。一見、目刺しを思わせる形状が、この上なく凶々しい存在に感じられる。
「P38か！」
溝口は、敵機の名を口にした。
ロッキードP38〝ライトニング〟。双発双胴という特異な形式の重戦闘機。
同機の情報は、盟邦ドイツより伝えられている。
最大時速は六〇〇キロ以上と、零戦よりも速いことに加え、火力が大きく、二〇ミリ機銃一丁、一二・七ミリ機銃四丁を、機首に装備しているという。
その機体が、豪州上空に姿を現したのだ。
「直掩隊は――？」
「見当たりません。先に引き上げたようです！」
「零戦がいなくなるまで、待ってやがったな」
日高の答を聞いて、溝口は敵の目論見を悟った。
米軍は過去の戦訓から、零戦がタウンズビル上空で戦える時間が数分であることを知った。
P38部隊の指揮官は、零戦が引き上げるのを確認した上で、戦闘開始を命じたのだ。
P38二機が、木更津空の前上方から急速に距離を詰めて来た。
機首に発射炎が閃き、青白い無数の曳痕が束になって、陸攻の主翼や胴体に突き込まれた。
コクピットを粉砕された陸攻が、機首を大きく下げ、墜落し始める。
左主翼に被弾した陸攻は、二番エンジン付近から

炎を噴き出し、黒煙を引きずりながら高度を落とす。
編隊から落伍した陸攻は、一〇〇〇メートル以上も高度を下げたところで、鈍い音を発して爆発し、ばらばらになって墜落する。
生き残った陸攻が反撃する。
複数の機体が、機首の七・七ミリ旋回機銃座から細い火箭を飛ばし、二機のP38に射弾を集中する。
溝口の目には、射弾が目標を捉えているように見えるが、P38が火を噴くことはない。
陸攻の努力を嘲笑うかのように、P38が新たな射弾を放つ。複数の機銃を束にして放つ火箭は、槍と言うより棍棒のようだ。
その棍棒が、陸攻一機の左主翼を、中央から叩き折る。片翼を折られた陸攻は、錐揉み状に回転しながら姿を消す。
合計三機の陸攻を仕留めたP38は機体を翻し、急降下によって離脱する。
ブザーの音が、コクピットに鳴り響いた。
尾部の二〇ミリ旋回機銃座を担当する佐藤邦雄二等飛行兵曹が、敵機接近の警報を送ったのだ。
「くそったれ！」
溝口は罵声を放ち、操縦桿を右に、左にと倒した。
全備重量九・五トンの双発爆撃機が、P38の「棍棒」を回避すべく、左右に、不規則に旋回する。
P38の射弾が、右の翼端付近やコクピットの右脇を通過する。
敵弾がコクピットの至近を通過したときには、風防ガラスが音を立てて震える。
あたかも、威嚇するような響きだ。絶対に逃がさない、と通告しているかのようだ。
「逃げ切って見せる！」
口中で呟き、溝口は右の水平旋回をかけた。
同時に操縦桿を前方に押し込み、降下に転じた。
前下方に、巨大な雲が広がっている。その中に飛び込めば、P38から逃げ切れるはずだ。
この直前まで、七〇〇〇メートルの高度を保って

いた陸攻が、急降下爆撃を思わせる勢いで高度を下げる。
機の後方から、連射音が伝わって来る。
胴体上面の七・七ミリ旋回機銃座と尾部の二〇ミリ旋回機銃座が、P38に反撃しているのだ。
P38も、追いすがって来る。
コクピットの右脇や左脇、あるいは真上を、青白い火箭の奔流が通過する。
前方の雲が近づき、目の前に迫って来る。
逃げ切れる——溝口がそう確信したとき、後方から強烈な衝撃が伝わり、機体が激しく振動した。
続いて、一番エンジンの後ろから前にかけて、敵弾が突き刺さり、引き裂かれたエンジン・カウリングが後方に吹っ飛んだ。
（万事休す！）
溝口が自身と部下たちの運命を悟ったとき、右主翼の燃料タンクが爆発し、一式陸攻の機体はばらばらに砕けていた。
（逃げ延びてくれ。P38出現の情報を、何としても味方に伝えてくれ）
空中に放り出されながらも、溝口は最後の力を振り絞り、木更津空、三沢空の残存機に、その願いを投げかけた。
直後、溝口の意識は暗転し、果てしなく深い闇の中に呑み込まれていった。

2

スウェーデン王国の首都ストックホルムの西部に、そのホテルはあった。
西側の窓からは、スウェーデン第三の湖メーラレン湖を一望できる。
湖面には、赤、青、緑等、色とりどりの帆を持つヨットが多数浮かび、湖岸には水浴を楽しむ家族連れの姿も見られる。
北欧では、夏はごく短く、年間を通しての日射量

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。